



伊賀市立壬生野小学校
2024年8月30日
発行責任者 藪中 俊典

全国学力量習状況調査の「学力調査」から

「学力調査」の結果から見える本校の子どもの学力の定着状況について掲載します。

本校の子どもたちの成果と課題

国語	全国と比べて下回っている。
算数	全国と比べてほぼ同じである。

本校の児童の結果は右のようでした。ちなみ

に、伊賀市の小学校に関しては、国語も算数も

ともに「全国と比べてほぼ同じである」という結果でした。

学校としては、全国学力・学習状況調査で測っている「学力」が、全ての「学力」を網羅するものではないとは思っていますが、学力の定着のために、子どもたちが、朝の学習や授業において、また、家庭での学習において、繰り返し復習を行ってきたがんばりの成果が、数値として表れたことは、自信としてほしいと思っています。また、「無解答率（解答を書いている割合）」が、ほぼ「0」であったことも自信としてほしいと思っています。つまり、子どもたちは、出題された問題に対して、自分なりに考え、何らかの答えを書いていたということです。このことは、「学習に向かおうとする意識の高まり」であるととらえています。

なお、「4月30日②号」では、一度、本校の子どもたちの正答率があまりよくなかった問題について掲載していますので、再度、お読みいただけるとありがたいです。

【国語】の成果と課題

①漢字の定着には課題が見られます。

最も正答率が低かったのが、「きょうぎ」（協議・競技）という漢字を書く問題でした。「なげる」も全国と比べて正答率はかなり低かったです。漢字の定着が課題として明らかとなりました。

②「文章で答えを書く」ことには成果が見られますが、「文章の構成をとらえながら読む」ことには課題が見られます。

今回、「記述式（文章で答えを書く）」の問題の正答率は、比較的よかったです。これまでに、「文章で答えを書く」ことに弱さが見られましたが、考えや振り返りを書いたり、くらしの出来事を書いたりする機会を大切にしてきた成果が、少しずつですが実を結び初めてきているととらえています。ただ、4月30日②号にも載せたように、「文章の構成をとらえる」ことができていないため、前に書いてある文章と同じように書けばよいことに気づけていない子どもたちが多いです。「ここには、このお話でテーマになっていることが書かれているな。」「ここには、例が書いてあるな。」「ここにはまとめが書いてあるな。」など、どんな内容が、どんな順で書いてあるかをとらえさせていく学習が必要であると考えています。

そうした「構成をとらえながら読む」ことができるようになってくると、今回、正答率の低かった、問題1ー「どんな順で話を整理しているか」、問題1二（2）「考えが伝わるようにどんな工夫をして書いているか」、問題2二「事実と感想、意見を区別して書く」、問題3二（1）「登場人物が迷っていることはどの段落に書いているか」といった問題にも答えることができるようになります。

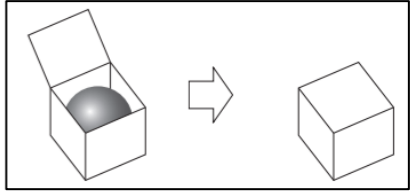
【算数】の成果と課題

①問題が長くても解こうという意識が、学習内容の定着につながっています。

問題5のように、問題が何ページにも渡って書かれている問題では、それだけで考えることをやめてしまう子どもたちが多くいます。しかし、本校の子どもたちは、問題5にも、全員が全ての問題に答えており、「無解答率は0」でした。問題5三の「記述式」の問題の正答率はよくなかったものの、他の問題は、ほぼ全国平均の正答率でした。このことから、何らかの答えを書こうという意識が、学習内容の定着につながっていると言えると考えています。

②2つの事象の関係をとらえることに課題が見られます。

今回、最も正答率が低かったのが、直径22cmのボールがぴったり入る立方体の体積を求める問題でした。この問題を解くには、次の2つのことが必要です。



- ①ボールの直径が立方体の1辺の長さと同じであることがわかる。
- ②直方体や立方体の体積は、「縦×横×高さ」で求められることが理解できている。

この問題には「22cm」という数値が示されているため、全員が「22」という数値を使って計算はしていましたが、①の「直径と1辺の長さの関係」を理解していたかという疑問が残る子どもたちがたくさんいます。そのため、立方体の体積をたずねられているのに、「ボール→丸→円→円周率3.14」と考え、計算式に3.14を使っている子どもが何人もいました。また、「22×22」と計算をしている子どもも多くいました。こうした子どもたちは、「体積と面積を勘違いした」というよりは、計算をしているだけで、「式と図形や立体の関係を結びつけて考える習慣が身につけていないことが考えられます。今回で言えば、「式で使っている『22』という数が、立体のどこの長さを表しているかまで考えていない」ということです。算数では、「図や表などと、式と言葉を結びつけて理解させることが必要」と言われます。授業では、それらに関連させ、仕組みについて理解させる指導を大切にしていきます。

③仕組みを理解できると、「できる」から「わかる」になります。

算数で取り扱う数は、「1枚、1m、1kg」といったようなたし算やひき算ができる数だけでなく、「速さ」や「割合」のようにたし算やひき算ができない数も学習します。今回、問題に出された「速さ」は、後者にあたります。しかし、その違いが理解できていないために、右上の問題では、「分速200mと分速200mをたして分速400m」と答えていた子どもが多くいました。また、右下の問題では、家から学校までは、ともに1200mであるにもかかわらず、「曲がっている方が、時間がかかりそう」と考えたのか、「かなたさんの方が、時間がかかる」と考えていた子どもたちがたくさんいました。この問題が、「分速何mですか」という問題であれば、計算をして答えを求めることができた子どもは多かったのではないかとおもわれます。では、何が足りないのかというと、「速さは、距離と時間で決まる」ということまでを理解していないということです。「計算ができる」と「わかる」は違います。②と同様、学校では、まずは仕組みをとらえさせ、その後、学習内容の定着を図る学習を進めていきます。

